

俊乗坊重源と阿彌陀寺

保 利 英 俊

俊乗坊重源は既に御承知の通り、治承四年（一一八〇）の源平の争乱に依つて災工した奈良東大寺の復興勸進の任にあたり、其の完遂に努力せられた名代の傑僧である。其の重源が造東大寺に用する料材を周防國（山口県防府市）の杣山に求めたのであるが、良材薙集の困難は云ふに及ばず、彼が当地に残した所の争蹟や社会的文化を列挙するならば枚挙に暇なき程である。依つて此處では其の一部として、周防別所（阿彌陀寺）の争蹟について所見を述べざる。

重源は造東大寺の勅命をおびて、文治二年（一一八六）四月十日（罹災後七月）周防國の防府に下向して國司貤の大任にあつたのである。阿彌陀寺文書に「文治二年四月十日拜任」とあるのは是れを意味するものである。即ち重源は当地の國衛（國村の在る土地）にあつて、造寺用材の採取は勿論の事、國衛の管理、政治・經濟・租税の徵集に専心したのである。取材の自然的障害の甚大なることはあの峻俊なる深山に十数丈もある大木を求出したのを見ても判るのであるが、それにも増して重源が苦勞したのは人為的障害であつた。

抑々當時の防府は私益の莊園が甚だ多く、それらの勢力たるや國衙の役人ですら左右されて
いる程の者であり、國衙自体が既に莊園と化しつゝあつたのである。其處に重源が國司の任に
あたつたのであるから、取材の困難は申迄もなく、是等地頭の横恣には並々ならぬ苦勞をした
事は、吾等鏡にも詳かに述べられてゐる所である。即ち重源は解狀に、

「重源申上候、取材木の事、いそぎ沙汰仕り候べきよし申し候て、まかりくたり候
ところ、可きく武士のらうせきとまり候はす、……中略……かねて國人をか
りあつめて城廓をかまへて、わたくしのそまつくりをはしめ候あひに、御材木引夫め
し候に、さらに承引せす候、……中略……またく院宣には、かり候はす、此如の事に
より候て、諸事ゆかす候へば、恐の爲に急申上候由、委は在方解に申上候。

重源忍々謹言

(重源判)
(在)

とあるのは正に彼等の横暴を物語るものである。斯様な状態にあつた防府は日に日に衰退の途
を辿つていたのであるが、重源の弛まぬ努力と治政の基に、更生の喜びを迎へる事が出来たの
である。

此の様な多端の事業の中にも彼は念仏僧としての行を怠らなかつたのである。即ち御白河法
皇の後生尊徳の祈禱所として又、念仏の別所として、國衙の北辺に阿弥陀寺別所を文治三年へ
一八七二に建立したのである。

窺つて見るに、重源なる者は初めは眞言の徒であつたのであるが、後に法然に皈依して念仏
の行に終始したのである。斯様なわけで彼が佛法然の持つ所の淨土思想に影響され、ひいては
周防國の知行に當つても、其の淨土信仰による教化を計り、在地土豪武士團の吸收同化を考へ

たのも最下所である。阿弥陀寺文書に造寺の意義を、

「造立寺塔、刻置多不佞像、成就大須弥功德山。東ニハ瑠璃淨刹トシテ造、當東大寺惣國分

寺、西ニハ九重曼荼羅八葉蓮中トシテ建立花宮、(阿弥陀寺)彼心地安置我靈影、……中略、

亦蒙教我誓願、今ニハ無量無盡幸福、子孫累喜之令興、呂緣、後ニハ引接安養心蓮中、如

斯悲願一毛有虛善者、皆我本地四十八願念、備三會曉殊勅出世同体別体常住三寶之御罰、

每八万四千毛坑可罷蒙也、仍爾無阿弥陀仙誓願之状如斯、願以此功德、普及於一切、我等

與衆生、皆共成佛道。」

と明らかにしている。又此の別所淨土堂を中心経藏、鐘樓、食堂、温室及び十二の坊があり

、十二人の念仏衆、六人の維那、三人の承仕が在任して、十二人の僧侶は十二時中不斷の念仏

を修し、温室を管した手は次の阿弥陀寺文書の一節に、

「抑念仏之行業、温室之功徳者、諸仏之所嘆、殊勝之菩提也、仍爾無阿弥陀仙(重源)毎

至便宜之处、建立此寺、爰恭奉造東大寺之便之勅宣、當國之執務已至十五箇年、然爾國府東

辺根部山麓ト水木便宜之地、建立不斷念仏弘長日温室、即棒功德上分、奉祈後白河禪定法

皇御滅罪、生由出離、生死成等正覺之由、於此別所者、為法皇御祈願所、永以可待止諸寺

制当之課役、以代々留守所在廳官人、為植越、為念仏温室無退失之計」云云。

と述べられている。是れにすれば、當寺を永く保護せんが爲に、代々の在廳の役人を持つて植

越とし、課役を免じている。

抑々重源は殆ど全國に亘って行脚している事は作出来にも、記されている所であるが、彼日

所々に別所を建立している。其の中で特に留意されるのは、淨土堂の建立と共に温室(風呂)

が置かれてゐる事である。その目的は先述の文にも明かである。

是等全ての別所は東大寺の末寺である事は論ずる迄もないことで、周防の別所も亦東大寺の知行國としてあてられた中心部なる國衙の近くに建立せられた所からして、此の本末關係は成立するものである事が、うなづけるのである。

最後に重源の念仏について求めて見よう。彼の念仏の行は法然に資師する前、高野時代から白蓮社まで、秘密の不斷念仏として行つていたものである。然らば何故に当時念仏が盛行したかと云へば、当時の世想は、源平の争亂、安元の入火、治承の旋風、養和の飢饉と天災地災の災禍が頻出し、斷末的恐慌の狀態であつた。其の中におびえ乍ら絶望的な境地にあえいでいた民心は必然的に、末末の極樂淨土を欣求し、西方の弥勒世界に憧れた事は當然の事とも云ふべきで、念仏の隆盛を見るに至つたのである。重源も同様に念仏によつて全ての淨化を計らうとしたものであらう。そこに法然の立宗となり彼の人格に皈依したもので、眞に念仏為本の徒ではないと思われる。と云ふのは、重源は作樂の中にも、弥勒三尊を本尊とし、その厨子には東大寺を置き、片方には弘法大師をかゝつて崇拜する尊を見れば、法然の主旨に反するのである。従つておそらくは、一宗一派に拘泥せずにその信仰の自由の基に弥勒の本願を信受し、念仏を奉行してゐたものと解するのである。